

## 懐風藻の出現

——書物としての漢詩集がなぜ作られたのか——

リ マンホン  
李 満紅

『懐風藻』は、天智天皇時代から奈良時代に至る約八十年間に作られた詩百二十編、現存百十六編を年代順に集めた一卷構成の現存する日本最古の漢詩集である。撰者はこの漢詩集という書物で何を表現したかったのか。まず手がかりになるのは撰者が自ら書いた序文である。懐風藻序が文選序を踏まえて書かれた文章であることは従来から指摘されている。特に、吉田幸一氏の論が緻密に両者を比較し、その類似性を指摘している<sup>①</sup>。

本発表では序文にうかがわれる文学観、編纂意図を、『文選』との比較を視野に入れつつ論じ、『懐風藻』という漢詩集が成立するまでの経緯を辿りたい。

### 一. 懐風藻序の本文についての分析

懐風藻序の本文を七部分に分けて分析する。

#### ▼第一部分

逃聴前修、遐観載籍、襲山降蹕之世、檀原建邦之時、天造草創、人文未作。

(逃く前修に聴き、遐に載籍を観るに、襲山降蹕の世に、檀原建邦の時に、天造草創にして、人文未だ作らずありき。)

※文化が生まれる前のことについて述べている。

#### ▼第二部分

至於神后征坎、品帝乘乾、百濟入朝、啓龍編於馬廐、高麗上表、囟烏冊於烏文。

王仁始導蒙於輕島、辰爾終敷教於訳田。遂使俗漸洙泗之風、人趨齊魯之学。逮乎聖德太子、設爵分官、肇制礼義。然而專崇积教、未遑篇章。

(神后坎を征し、品帝乾に乗じたまふに至りて、百済入朝して、龍編を馬厩に啓き、高麗上表して、烏冊を鳥文に図く。王仁始めて蒙を輕島に導き、辰爾終に教を訳田に敷く。遂に俗を洙泗の風に漸め、人を齊魯の学に趨かしむ。聖德太子に逮びて、爵を設け官を分かち、肇めて礼義を制めたまふ。然すがに専らに积教を崇み、未だ篇章に遑もなかりき。)

※国の文化の始まりを述べている。大陸から文化が伝来した時を「未だ篇章に遑もなかりき」とした上で、日本における文化の伝来を詳しく述べている。懐風藻は伝来した文化、すなわち漢文で書かれた書物であるからこそ、撰者は文化伝来の過程にこだわったと考えられる。

### ▼第三部分

及至淡海先帝之受命也、恢開帝業、弘闡皇猷。道格乾坤、功光宇宙。既而以為、調風化俗、莫尚於文、潤德光身、孰先於学。爰則建庠序、徵茂才、定五礼、興百度。憲章法則、規模弘遠、復古以来、未之有也。於是三階平煥、四海殷昌、旒纒無為、巖廊多暇。旋招文学之士。時開置醴之遊。当此之際、宸翰垂文、賢臣献頌。雕章麗筆、非唯百篇。但時經乱離、悉從煨燼。言念湮滅、軫悼傷懷。

(淡海先帝の命を受けたまふに及至びて、帝業を恢開し、皇猷を弘闡したまふ。道は乾坤に格り、功は宇宙に光れり。既にして以為ほしけらく、風を調へ俗を化むることは、文より尚きことは莫く、徳を潤らし身を光らすことは、孰か学より先ならむと。爰に則ち庠序を建て、茂才を徵し、五礼を定め、百度を興したまふ。憲章法則、規模弘遠、復古より以来、未だ有らず。是に三階平煥、四海殷昌、旒纒無為、巖廊暇多し。旋文学の士を招き、時に置醴の遊を開きたまふ。此の際に当りて、宸翰文を垂らし、賢臣頌を献る。雕章麗筆、唯に百篇のみに非ず。但し時に乱離を経、悉煨燼に従ふ。言に湮滅を念ひ、軫悼して懷を傷ましむ。)

※天智朝の功績は宇宙（全世界）を照らすと賞し、天智朝を賛美している。「宸翰文垂らし、賢臣頌を献る。雕章麗筆、唯に百篇のみに非ず」のように詩文の由来と盛衰を述べながら、重点は天智朝の賛美に置かれている。そこには撰者の政治に関する主観的態度がうかがわれる。懐風藻序が特定の時代（天智朝）を称讃する態度を示していることがわかる。

#### ▼第四部分

自茲以降、**詞人間出**。龍潜王子、翔雲鶴於風筆、鳳翥天皇、泛月舟於霧渚、神納言之悲白鬢、藤太政之詠玄造、騰茂実於前朝、飛英声於後代。

（茲れ自り以降に、詞人間出す。龍潜の王子、雲鶴を風筆に翔らせ、鳳翥の天皇、月舟を霧渚に泛かべたまひ、神納言が白鬢を悲しび、藤太政が玄造を詠める、茂実を前朝に騰げ、英声を後代に飛ばす。）

※「詩」の意義や詩形については全く触れることなく、「詞人間出」と言い、特定の「詞人」の名前をあげている。その「詞人」とは、「龍潜王子」（大津皇子）・「鳳翥天皇」（文武天皇）・「神納言」（高市麻呂）・「藤太政」（藤原史）である。懐風藻序の重点は「詞（詩）」そのものよりも、天皇・皇子・臣のような特別な位置にある「詞人」に置かれている。

#### ▼第五部分

余以薄官餘間、遊心文囿。閱古人之遺跡、想風月之旧遊。雖音塵眇焉、而餘翰斯在。撫芳題而遥憶、不覚涙之泫然。攀縲藻而遐尋、惜風声之空墜。遂乃取魯壁之餘蠹、綜秦灰之逸文。

（余薄官の餘間を以ちて、心を文囿に遊ばす。古人の遺跡を閲、風月の旧遊を想ふ。音塵眇焉と雖も、餘翰斯に在り。芳題を撫でて遥に憶ひ、涙の泫然ることを覚らず。縲藻を攀ちて遐に尋ね、風声の空しく墜ちなむことを惜しむ。遂に乃ち魯壁の餘蠹を收め、秦灰の逸文を綜べたり。）

※「芳題を撫でて」云々のごとき感傷的な表現が見られる。『懐風藻』は撰者

が辛うじて集めることのできた漢詩の集成であり、「芳題を撫でて遥に憶ひ、涙の泣然ることを覚らず。縵藻を攀ちて遐に尋ね、風声の空しく墜ちなむことを惜しむ」の四句には、先人が作った詩文に対する、撰者の敬意が十分に溢れている。

#### ▼第六部分

遠自淡海、云暨平都、凡一百二十篇、勒成一卷。作者六十四人、具題姓名、并頭爵里、冠于篇首。

(遠く淡海自り、云に平都に暨ぶまで、凡て一百二十篇、勒して一卷と成す。作者六十四人、具に姓名を題し、并せて爵里を頭はし、篇首に冠らしむ。)

※「作者六十四人、具に姓名を題し、并せて爵里を頭はし、篇首に冠らしむ」と述べ、ここでも作者という存在をとりわけ強調しているといえる。懐風藻序が作者を強調したのはただ数が少ないからなのではなく、ほかの部分と同じように、詩人に重点を置いているというメッセージ性を前面に出したかったからである。そして、その詩人達が生きた時代を淡海朝(天智朝)以後と特定しているのである。

#### ▼第七部分

余撰此文意者、為将不忘先哲遺風。故以懐風名之云爾。于時天平勝宝三年歳在辛卯冬十一月也。

(余が此の文を選ぶ意は、将に先哲の遺風を忘れずあらむが為なり。故れ懐風を以ちて名づくるぞ。時に天平勝宝三年歳辛卯に在る冬十一月なり。)

※ここで編纂動機を「将に先哲の遺風を忘れずあらむが為なり」と強調し、「故れ懐風を以ちて名づくるぞ」と名の由来を説明してはいるが、具体的な編纂方法を述べてはいない(実際、ほぼ作者の時代順に配列されている)。『懐風藻』が文学作品集という範囲を超えた、時代や政治を表す意味を持つ書物であることを意識し、編纂方法ではなく、編纂動機に重点を置いている

のではないだろうか。また、自分の名を明かしていない『懐風藻』撰者は、ここで「時に天平勝宝三年歳辛卯に在る冬十一月なり」と、編纂の時期を明示して「時代」というメッセージを書き留めたと考えられる。

## 二. 懐風藻序の文学観

懐風藻序の撰者の文学観はどういうものであろうか。序文にはいくつかのキーワード、「人文」「篇章」「遑」「暇」がある。

### (一) 「人文」と「篇章」が意味するもの

懐風藻序の冒頭文を見てみよう。つまり第一部分である。

「人文」の語は、文選序にも「易曰、觀乎天文、以察時變、觀乎人文、以化成天下」（易に曰く、天文を觀て、以て時の變を察し、人文を觀て、以て天下を化成する）と見えるように、『易』「賁」に基づく語で、「天文」に対応して用いられている。「天文」とは自然の文様、例えば日月星辰の配列の意で、「人文」とは人間の文様、例えば人倫の秩序の意である。「人文」とは「天文」に対応する天下の指標なのである。それに対して、懐風藻序は「人文」を「天文」の対として捉えてはいない。「人文」という用語こそ『文選』同様に『易』によるものであるが、その概念には違いが認められるようである。

懐風藻序の冒頭文とはほぼ同じ構造を持つ文選序の冒頭文を見てみよう。

「式觀元始、眇觀玄風、冬穴夏巢之時、茹毛飲血之世、世質民淳、斯文未作。」（式て元始を觀、眇かに玄風を觀れば、冬は穴にすみ夏は巢にすみし時、毛を茹き血を飲みし世は、世は質に民は淳くして、斯の文未だ作らず）。「人文未作」（懐風藻序）でなく、「斯文未作」となっている点が異なる。

小島憲之氏は、懐風藻序の「人文」は文選序の「斯文」の潤色だとして、天文に対応させるいわゆる「化成天下」の人文とは解釈せず、単に「人の作る文（あや）」だと解釈している<sup>②</sup>。また、他の諸解釈も懐風藻序の「人文」を「天下化成」のものだと解釈していない<sup>③</sup>。では、懐風藻序の「人文」をどう解釈すべ

きなのか。

懐風藻序の第二部分を見てみよう。文字や儒学など中国の文化が伝来し、聖徳太子によって官位、礼儀が定められた。しかし、この時はまだ「篇章」に至らなかった。ここにおいて、文字や文化が伝来したにも関わらず、「篇章」を作る暇はなかったと撰者は強調している。文選序に於いて、「人文」と「斯文」（文章）とは別の物である。それに対して、懐風藻序の「人文」というのは、文字を始めとする文化の意である。懐風藻序は①「天造草創にして、人文未だ作らずありき」から、②文字や儒学の中国からの伝来へ、そして③専ら釈教を崇み、ついに④「篇章」が作られるようになった時代へと文字文化の歴史を説いている。

懐風藻序の第三部分を見てみよう。ここでは「篇章」を「雕章麗筆」と解釈し、美しい文学作品であることを明確にしている。つまり、「篇章」は「文学之士」によって作られた文学作品の意である。文字・儒学・釈教という文字文化の歴史の高み（到達点）として、「篇章」を位置づけている。

## （二）「遑」「暇」が意味するもの

「人文」と「篇章」の意味を確認した上で、次に注目したいのは、第二部分にある「未遑篇章」（未だ篇章に遑もなかりき）と第三部分にある「旒纒無為、巖廊多暇」（旒纒無為、巖廊暇多し）の文である。「遑」とは暇の意で、淡海帝（天智）以前は暇がないから、「篇章」（いわゆる文学作品）が作られなかった。それに対して、淡海帝の時代は天下泰平であるから、君臣ともに暇があり、やがて「篇章」が作られたと強調している。

しかしこれは、文学というものが暇潰しの産物で、政治と無関係のものであるという撰者の文学観を意味しているのではない。むしろ逆に、国家体制がよく整い、天下が良く治まったからこそ美しい文学作品が生まれたというのである。そういう意味で、政治と文学とは深く関わっているとする撰者の文学観が読み取れる。優れた文学作品が生まれた事実こそが、天下をよく治めた政治の

正当性の証しであると主張しているのがある。

懐風藻序第三部分に「但時経乱離、悉従煨燼」（但し時に乱離を経、悉煨燼に従ふ）という文がある。壬申の乱（六七二）が原因で天下泰平の淡海帝の時代に作られた数多くの「雕章麗筆」（篇章）は焼失してしまったことを述べている。つまり、政治的混乱の時代のために、文学作品が消失したと言っている。ここにもまた、懐風藻撰者の文学観がよく表明されているのである。

懐風藻序第四部分に「自茲以降、詞人間出」（茲れ自り以降に、詞人間出す）という文がある。「茲れ自り以降に」とは、壬申の乱以後の意味である。天武・持統朝には中央集権の国家体制も完成しつつあった。そして、懐風藻撰者はその時代に「詞人が間出した」と述べ、その例として四人の詞人を取り上げる。その四人とは、「龍潜王子」（大津皇子）・「鳳翥天皇」（文武天皇）・「神納言」（高市麻呂）・「藤太政」（藤原史）である。この四人はいずれも漢詩文にすぐれた人物である。詞とは漢詩のことに違いなく、ここで、『懐風藻』の撰者が漢詩文のみを文学だとしている姿勢を示している。

『懐風藻』の撰者は漢文化を重視する天皇を重視し、漢詩のみを文学として位置づけている。漢詩が作られることこそ天下泰平の証しであり、政治の正当性の証しであるというのである。これこそが『懐風藻』の撰者の文学観であり、懐風藻序に託された撰者のメッセージの一つなのである。そして、その証しとして、正に『懐風藻』という漢詩集が出来たというのである。このような文学観の背後にあるものは何であろうか。辰巳正明氏が指摘したように、懐風藻序の天智朝の記述によれば、魏の文帝曹丕（そうひ）が唱えている「文章経国」、「君臣和楽」の思想はすでに近江朝において現れている<sup>④</sup>。その後、平安初期において、「文章経国」思想は重視されるに至る。懐風藻序は、その先駆としての位置にあるのではないだろうか。

### 三. 結論にかえて

もう一度第七部分を見てみよう。第七部分にある「余撰此文意者、為將不忘先哲遺風」(わがこの文を撰ぶところは、將に先哲の遺風を忘れずあらんがためなり)は、「私がこの詩集を撰した理由は、先哲の遺風を忘れないため」であると、撰者の編纂意図を直接に書いた一文である。「先哲遺風」とは、前述した懐風藻序の文学観を前提として考えると、先哲が残した詩風という意味以外に、文学(漢詩)を重視した昔の時代の風気という深い意味を持つと考えられる。

例えば辰巳正明氏は、先哲の遺風を重んじる姿勢には古と今を重んじる態度があるとしている<sup>⑤</sup>。確かに、撰者の編纂意図を分析する際、撰者が生きた時代、つまり懐風藻序の「今」を忘れてはならない。

では、撰者が生きた時代はどのような時代であったのだろうか。懐風藻序によれば、『懐風藻』が成立したのは天平勝宝三年(七五一)で、孝謙天皇(在位七四九～七五八)の時代である。撰者は未詳だが、少なくとも孝謙天皇の前の聖武天皇(在位七二四～七四九)の時代にも生きた人物だと推測できる。

第五部分にある「余以薄官餘間、遊心文囿」(余薄官の餘間を以ちて、心を文囿に遊ばす)も、懐風藻序の撰者の編纂動機を書いた一文である。「余以薄官餘間」(余薄官の餘間を以ちて)の表現に注目してみよう。この表現は文選序の「余緘撫餘閑」(余監撫の餘閑に)の模倣だが、そこで述べられている意味は撰者の編纂意図と関わっている。「餘間」は前述した「遑」「暇」と同じ意味である。官人としての撰者には「暇」がある。つまり、漢詩を作る余裕がある。撰者は未詳だが、撰者が書いた序文からうかがえる漢詩文の教養を考えると、撰者自身も漢詩を作っていたと十分に想像できる。そして、撰者は漢詩を作ることに留まらず、漢詩集を編纂した。ここからもまた、撰者が人々に文学＝漢詩に対する関心を喚起させようという切実な願いを読み取ることができるのである。

再び、懐風藻序の天智朝についての記述の部分に注目したい。第三部分であ



る。白村江の敗戦と百姓に反対された近江大津宮の遷都のような天智朝の大きなでき事があったにも関わらず、懐風藻序は世相の不穏を意味する記事に全く触れていない。天孫降臨から聖徳太子までの記述において、撰者は『日本書紀』の記事を踏まえてきた。では、なぜここで天智朝讚美のみにこだわったのだろうか。その背景には撰者の文学観がある。漢詩が作られることこそ天下泰平の証明であるという文学観が撰者の歴史観を左右し、懐風藻序の中で天下泰平の天智朝を作り上げた。

それと同じように、懐風藻が編纂された「今」の時代は歴史上において、天下泰平の時代とは言えないが、だからこそ、撰者は懐風藻を編むことをとおして、聖武天皇と孝謙天皇の治世の安定を世に示そうとしているのではないだろうか。

『懐風藻』が成立した後、平安初期において、約一世紀の間漢詩文隆盛の時代が続いた。勅撰三集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』も編纂され、漢詩文は空前の盛期となった。『懐風藻』は私撰集（公撰集の説もある）であるが、公的な文学の宣揚の性格が強い。漢詩集『懐風藻』は、後の漢詩文が公的な文学として登場するための、重要な一礎石となった。漢詩の重要性を唱える、これこそ撰者の編纂意図の中心にあった目指すところなのであり、『懐風藻』という漢詩集が出現した所以である。

#### [注]

- ①吉田幸一「懐風藻と文選」『国語と国文学』第9巻12号、1932年12月。
- ②小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』、岩波書店（日本古典文学大系）、1964年6月。
- ③懐風藻序の「人文」の解釈について、他には「文」（釋清潭『懐風藻新釋』、丙午出版社、1927年11月）「人類社会の文明。人の世の文明」（澤田總清『懐風藻註釈』、大岡山書店、1933年7月）「人間世界の文明。人の世の行われる秩序や條理」（杉本行夫『懐風藻』、弘文堂書房、1943年3月）のような諸解釈がある。
- ④辰巳正明「近江朝文学史の課題」『万葉集と中国文学 第二』、笠間書院、1993年5月。
- ⑤辰巳正明「懐風藻の詩学（一）先哲の遺風」、『懐風藻研究』第4号、1999年5月。

なお、『懐風藻』の本文は注②掲載書、『文選』の本文は中国古典文学叢書『文選（一）』（上海古籍出版社、1986年8月）によった。但し、便宜上通行字体に改めたところがある。

### \* 討議要旨

相田満氏は、『懐風藻』序の「而専崇釈教」は、文字を使うことに長けた釈教の人々がいた一方で、そうではない当時の文人たちが作詩技術の習得はできたのか、と読めるのではないかと指摘した。村尾誠一氏は、「先哲」の範囲が日本のみならず中国まで及ぶのか、また漢詩を集めた人も含めるのか、と質問し、発表者は日本の漢詩を作った人と解釈していると回答した。李宇玲氏は、撰者が編纂時に名を明かさなかった理由について、聖武・孝謙朝に対して距離を置いたためではないかと指摘した。